

大下 友昭  
市立大洲病院 放射線室



#### [はじめに]

今回、平成 25 年度放射線被ばく相談員育成講習会に参加する機会をいただきました。

平成 25 年 10 月 5 日、6 日の二日間の日程にて日本放射線技師会での講習会に参加して参りましたので、その内容を一部ですがご報告をさせていただきます。

#### [内容]

##### 1. 放射線被ばく相談員育成制度の意義

まず初めに、日本放射線技師会の中澤会長より福島第一原子力発電所事故以降の日本放射線技師会の取り組みと対応について報告がありました。事故当時、マスメディアへも日本放射線技師会から専門官を派遣していたとのこととで活動の幅の広さを実感しました。

##### 2. 原発事故による避難生活とメンタルヘルス

続いて、臨床心理士の先生より福島県の状況についてこちらのタイトルで講義していただきました。福島県は、海沿いの地域と山沿いの地域で気候も風土も大きく異なり、避難生活には大きなストレスがかかっているとのことでした。また、他県に比べて多くの住民が福島県外へと避難・転居しているそうです。そういった状況の中で様々な

ストレスが体調の変化として表れているようです。その結果、持病の悪化であったり生活習慣病の発症・悪化につながっているとのことでした。また、福島県内では自殺者もふえてきているそうです。これら震災関連死は、福島県においては地震や津波による直接死者数とほぼ同等の人数で発生しているようでありました。

さらに、原発事故による避難者は震災による避難者と同じように被災者であるにも関わらず、他の避難者からお前たちのせいだと言われたり、様々な差別を受ける現状があるとお話いただきました。これは震災による避難者のやり場のない怒りとしての表れであったり、電力会社の建設した仮設住宅と、他の仮設住宅の間に設備面で差があることなどからの妬みであったりするそうです。

##### 3. 相談員の倫理

こちらの講義は、まず実習から始まりある事例が紹介されました。この事例をもとに、倫理とは何かということを考えることから始まり非常に興味深い内容でした。社会における倫理とは他者が存在しない場合においてのみ不必要であり、相談という行為を行うことには必ず倫理的姿勢が伴うとのこと

でした。また、相談者が本当は何を必要としているのかを良く聞いて、解決に必要な専門家や機関を紹介することも必要であり、普段からコネクションを作っておくことが重要であるそうです。

また、我々放射線技師の仕事にもあるように守秘義務が存在し相談者の秘密は守らねばなりません。しかし、この守秘義務には制限があり、それは、相談者の生命にかかわる危険性があると予見される場合・他者に対して危険が及ぶと予見される場合・虐待が疑われる場合だそうです。

#### 4. 災害時の被ばく相談

相談の内容は発がん・遺伝障害・胎児形態異常にかんすることで90%を占めていて、これは社会常識として被ばくは少しでも悪く、子供は被ばくに弱く、妊娠中の被ばくは危険であると認識されているからとのことでした。これらの社会の常識は40年前のデータから変わっていないらしく簡単に変えることは難しいが専門家はそれらの影響について答えることのできる術を身につけることが重要であるとのことでした。事故発生時の電話相談では、発生直後においては身の安全を守る情報が求められ、その後生活するうえでの安全に関する相談が増加したとのことでした。さらに相談時には、機材の流失により測定ができないことに対し、事実を隠しているのだ・国は信用できない、といった声があり、自分たちはそういつ

た責任をもつ立場ではなく、あくまでも専門家としてお話を聞いているのだという第三者的な対応が重要であるとのことでした。

また、個別の面談による相談会も行ったそうです。その際には誤った情報による不安が多く、とりわけ内部被ばくについての不安が強い。また、個人面談は説得だと思い敬遠されるという方もおられたようです。ですが、地元の医療機関から参加することで相談者に安心感を与えることもできたとのことでしたので、私達も地域とのつながりを大事にしておかねばならないと感じました。

#### 5. 内部被ばくについての考察

#### 6. 被ばく相談における傾聴の重要性

#### 7. 実習（傾聴訓練）

#### [まとめ]

今回、全ての内容をご紹介することはできませんでしたが、大変有意義な二日間でした。また、被ばく相談というと放射線量を科学的に説明し、納得してもらおうと考えてしまいます。ですが、一番大事なことは相談者の方の不安が解消されることであるとお話がありました。本当に不安な部分は何か、何を求めて相談に来たのかという内面的な部分に目を向けることが重要なのだと感じました。また、放射線技師として対応できないことは、臨床心理士などチームとして活動することが必要不可欠であり、今までと違った視点で相談というものがあり方を考えることができた貴重な研修でありました。